

述懐するのは、現フソウドリーム、そして親会社扶桑電機工業の社長でもある佐野健二郎だ。「あと1か月でこの場所（東陽町のショールーム）も出ていかないといけない、と草場たちが言うんです。僕も一ユーザーとして彼らの仕事のファンだったから、思わず、うち（扶桑電機工業）の社長室が空いてるから使いなよ、と言ってしまったんですよね」

同社の屋上には練習用の鳥カゴもあり、ちょうどいい。そこで再起をはかるまでの間、草場らに間借りさせてあげよう……ところが、である。

「気づいたら、僕が社長になっていた（笑）。カミさんは『なんでそうなるの?』と言うし、本体の社員たち140名は『ゴルフ好きなのはいいけど、クラブメーカーになることはないでしょ』って思っていたでしょう」

ゴルフを産業として見た場合決して簡単に船出できる状況でないことは、日本有数の自動車メーカーの経営者である佐野にわからないはずはなかった。少なからず、葛藤があったはずだ。しかし、佐野は決断した。「メイドインジャパンのモノ作りを絶やしたくない。せつかくいいものを作っているのに、み



扶桑電機工業の社員が製作してくれた、クラブを固定するための治具。3方向から均一に力を加えるため、ホーゼル部分の中心がズレることなく固定できる

すみずみ失わせたくなかった」

そうして草場ら現場の人間と佐野の想いはかさなった。「こりや大変だぞ」（佐野）という冷静な視点も持ちつつ、2011年、ついにフソウドリームを4名で立ち上げる。その時、まず佐野がおこなったのは、「姫路のクラブ研磨職人である田淵さんのところへ行くことでした」。

研磨職人の田淵正敏。それはフソウドリームにとって、仕事の、モノ作りの生命線だった。

「ま さか連絡なしで、いきなり来られるとは……」

と、田淵は当時をふりかえる。いつものように工房で仕事をしていると、畑の中で社長が迷っていることと連絡があった。

Non Fiction

ノンフィクションA

扶桑電機工業の屋上には、佐野の社長就任前から3打席の鳥カゴが設けられていた。先代社長もゴルフ好きだったようだ

「ここから、どうやって帰ればいいんでしょうか……?」

必死になってやってきた田淵の工房。どうやってたどり着いたのか、くわしい道筋はかけらも記憶がなかった。

「駅まで車で30分ばかりかけて送ってもらいました」

笑って述懐する佐野だが、それは情熱に突き動かされていた証拠である。こうしてフソウドリームのモノ作りの大動脈に血流がみなぎりはじめた。

フ ソウドリームのクラブの形状は流体力学にもとづいている。新潟にある運動科学研究所の清水定次が監修し、空気の流れを巧みにコントロールしてヘッドのブレを抑える。そのシルエットは、スポーツカーの車体のようにである。

そんな美しいヘッドも、シャフトにきちんと接合されてはじめて100%の力を発揮する。

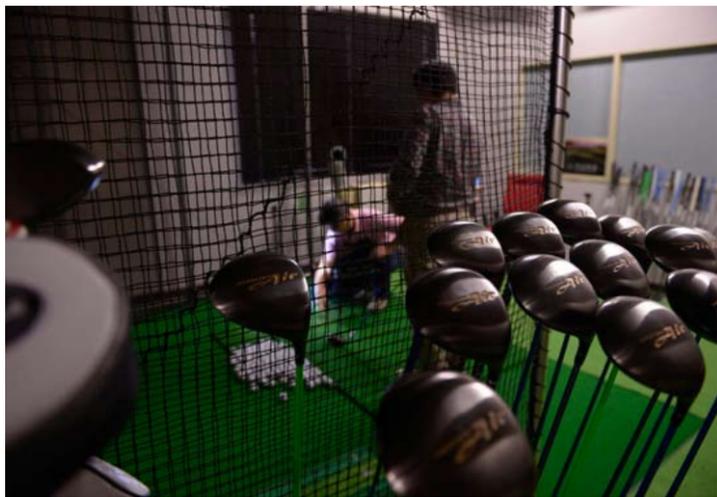


いかに時代に逆行していても長くつかえるモノ作りを目指す

姫路の職人のもとへアポイントもとらずに押しかけた

思い立った佐野は、アポイントを取らず、東京から新幹線に飛び乗って姫路へと向かったのだ。フソウドリームに力を貸してほしいと依頼するためである。だが資料にあった住所は、畑の中に無人の倉庫があるだけ。炎天下スーツを着て畑の中をさまよった佐野はようやく田淵のもとへたどり着く。

「会ったとたん、佐野社長がぎゅっと握手をしてこられて、それはびっくりしました。それか



弾道計測をしながらフィッティングができる試打室。オフィスや工場の空きスペースを少しずつ利用しているため、試打室のほか、ショールームや工房も社内の飛び地のように点在している

らモノ作りの話をしたりしたんですが、なにしろ急で（笑）」工房を見学した佐野も驚愕していた。「田淵さんの作られるものの美しさと、作っている現場とのギャップに目がさめるような思いがしました。決して広くはない場所、黙々と一人で作業をしている姿。作品は洗練されているけれど、作る過程では一人の人間が汗を流している。こうして作られたヘッドを最高のフィッティングで提供する。長く使えるモノ作りを絶対につづけた」とあらためて思いました」

決意をあらたにした佐野は、突然の訪問に戸惑う田淵に熱弁をふるった。だが、佐野の話に耳にかたむけつつもなかなか明確な返答をしなかつた田淵。会谈は長時間におよんだ。

しかし、諦めずに説得をつづける佐野に、田淵はついに首をたてにふった。

「結局は、いいものを作りたいという気持ちがかさなるかどうか。そういうところがお互い納得したところなんでしょうな」待ち焦がれた田淵の言葉を聞いた佐野は深々と頭をさげ、工房を後にしようとした。しかし、すぐさま田淵のほうを振り返って言ったという。

草場は日本の他の現場と比較すると、ゴルフの現場には改善の余地がかなりあるという。その点において、フソウドリームとして再起したことで、明らかに発展したことがある。それは、80年をこえる製造業の技術が惜しみなく注がれていることだ。前述のヘッドとシャフトを接合するケースもそうだ。両者の径が微妙に合わない場合、ホーゼルにドリルを入れて穴を広げる。このとき、従来はヘッドを固定するのに1方向から力を加えるが、そうすると必ずドリルとホーゼルの中心にズレが生じてしまうのだ。

悩んでいる草場に、すぐに扶桑電機工業の社員が手をかした。ヘッドを3方向から固定するを製作してくれたのだ。これによって、ヘッドとシャフトの接合の精度は格段にあがった。結果、クラブの仕上がりはこれまで以上によくなったのである。「クラブ作りをしているだけで、は絶対にたどりつかない技が、日本のモノ作りの現場にはほとんどあるんです。この先も秘密の技がたくさん注ぎ込まれつつあります。畑違いの人が集まったからこそできる、ちょっとした奇跡です」

草場は製作中のクラブとヘッドを手にしながら語る。たしかに、フソウドリームの工房の横では、駅のホームで使われる自動ドアが音もなく動き、さまざま研究開発がおこなわれている。日本の、町工場の底力が、わずか数歩で吸収できる環境。モノ作りが格段に進歩するという草場の言葉にもうなずける。

*

い まだゴルフ産業をめぐるニュースに明るいものはいくつかない。男子ツアーの削減、ゴルフ人口の減少、ゴルフ場の閉鎖……。アベノミクスの波及はまだまだである。そんな中、フソウドリームはクラブメーカーとして船出したばかりである。「長くつかえるモノ。そして長く使えるためのサービスを提供していきたい」

と佐野と草場が口をそろえる。それは新しいクラブを作ること、マーケットを回転させる従来のクラブ作りとは大分スタンスが異なる。決して簡単なことではないだろう。佐野は言う。「まだまだ、やっとスタートしたばかりなんです」

日本のモノ作りの底力が、クラブ作りをどこまで進化させるのか。フソウドリームにジャパニーズドリムがかさなって見える気がする。（文中敬称略）